

---

# 野球魂

白石のっち

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

野球魂

### 【Nコード】

N7266C

### 【作者名】

白石のっち

### 【あらすじ】

携帯小説用に書いた野球がテーマの短編です

ストライク、アウト。そう審判の告げる声、私の前のバッターがあいつに抑えられたことを告げる声だ。

同時に湧き起こる歓声の中、ネクストバッターズサークルで素振りをしていた私は大きく深呼吸すると、マウンド上で汗を拭いているピッチャーへと視線を向けた。

突然の引退宣言から一ヶ月。マウンド上のあいつの引退試合、その最後の対戦相手に自分が選ばれたことは偶然なんだろうか。

私はバッターボックスに入り、軽く素振りをする。あいつとは同じ年にプロに入った同期であり、その前の甲子園では決勝の舞台でお互いに投げ合いもした。

バットを構えた私の横を直球が通り抜ける。ストライクと審判の声。甲子園の時に比べてスピードは落ちたが、その分制球力は増した。

それでも今と昔の直球、どっちの方が打ちづらいかと言えばやはり甲子園の時の球だった。当時の私はその直球を見てあまりのレベルの差に、プロになる人とそうでない人、その壁はこんな所にあるのかと感じたものだった。

再び直球が飛んできた。直球に狙いを絞っていた私は反射的にバットを振り下ろす。

あいつ同様私の力も萎えていた、完璧だと思ったスイングのタイミングが実際はやや振り遅れており、バットに当たったボールはそのまま後ろの観客席へと入りファウルになってしまふ。

甲子園から24年。鳴り物入りでプロ入りしたあいつも、ドラフト下位に拾われる形でプロに入った私もよくこの世界でやってこれたと思う。

3球目、あいつはカーブを投げた。あいつの一番の得意球でもあり、甲子園ではバットにすら当てられなかった球だ。

このカーブはあの頃と変わっていなかった。私はギリギリまでボールを引きつけると、体を強引に捻らせ下からすくい上げるようにバットを回す。手にはバット越しに伝わる手応え、迷わず私はバットを放り投げ、走り出した。

ボールがスタンドに吸い込まれるのを見ながら、私はゆっくりとグラウンドを駆ける。

「そのカーブが打てるんならまだいけるな、俺の分まで野球を楽しんでくれ」

マウンド上から大きな声であいつが話しかけてきた。それも、密かに今期の引退を考えていた私の心を見透かしていたかのような言葉で。

もしかしたらあのカーブはあいつがわざと私に打たせる為に投げたのだろうか。いや、それは考えすぎに違いない。

私は手を軽く挙げ、あいつに答えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7266c/>

---

野球魂

2011年10月4日10時42分発行